

# 舌を噛み切った女

またはすて姫

室生犀星

青空文庫



京にのぼる供は二十人くらい、虫の垂衣たれぎぬで蔽おほうた馬上の女のすがたは、遠目にも朝涼あさすずの中で清艶せいえんを極めたものであった。袴野はかまのノ磨まろを真中に十人の荒くれ男が峠路とうげみちにかかる供ぞろいの一行を、しんとして展望していた。離れ山の洞窟のこの荒くれ男から、少し隔はなれた切株の上に腰をおろしたわかい女は、なまなましい脚を組んで、やはり山麓をゆく一行おもむろを徐に見まもっていた。「野伏のぶせ、そちが先に立て。」

あだ名を野伏のぶせノ勝かつというわかい男は、もう馬を引き出して、後は総勢であつたが、袴野ノ磨はおれが行かなくともよかろうと、いった。すると切株の上の女はあたしも行くといい、立ち上つた。

「すてはならぬ。」

何故ならぬと、すて姫は気色けしきばんでみせたが袴野はこれには応こたえない、用意した男たちは密林の中にはいると、一瞬の間に姿を消した。袴野は手めがねをして眼を放さないでいる。どうして一緒にやらないのさ、野伏と一緒にだからやきを廻まわしているのねと、すては密林がそよもしない山風やまなぎの中でいった。こんな山で女の声が立つ奇異な生なましい感じ、袴野はすてには答えずに、彼女にちかづくと手を引いて、その肩を推いいた。余り嫉やきすぎるわよ、仕事にも出掛けないであたしに付き切りじゃないの。それも仕様がな、お前は一日ずつ女になって行くばかりで、おれはそのわかさを趁おっかけている、おれの外はみなわかい男ばかりだ、

殊に野伏はわかい、野伏はお前のそばに寄りたがっているし、お前は焚火たきびの座でも野伏の向う座にすわるようにしている。おれはお前の細かい気づかいを見ていると一日は永く辛いつらい、袴野はすて姫の手を引いて洞窟にはいつて行こうとするが、これには、すて姫は少しもいやがりもしなかった。こう諾きかなかつたらすて姫のこぼれるわかさを、溶きほぐすすべも、なかつたからだ。永い愛撫の時が終った。さすがにすてが洞窟の前の明るい広場に立ったときは、その肉体は隙すきだらけで柔らかく、もみほぐされてほたついていた。

「いまの内に水あびを。」

「皆のいる間は水あびもさせないのね。」

「皆はそれを見たがるからだ、おれは皆にそれを見せたくない、……」

「あんなに沢山にいる男の眼からどうからだを匿かくしたらいいのさ、歩けば足が出る。暑ければ胸が出る。」

袴野はそれには答えずに、また、手めがねをして眼を旅人の一行から放さない、不思議なことに向うの山峽やまかいに突然黒い人間らしい者が、殆どそれは胡麻粒ごまつぶくらいの一いっ行がうごいて、旅人のあとを追うているらしい、向い山のおなじ山稼かぎの貝かいノ馬うますけ介けの追お手てであつた。これは無事に落ち著たいても財たからは二つの山割りか、悪あくいけば揉もみ合いあひになるに決まつていた。袴野は失敗しまつたと呟つぶやいたが、

「すて、あれを見よ。」

「貝ノ馬介ね。貝はお侍だというじゃないの。」

「もとはみな侍なのだ、貝はお前を狙っている。」

袴野はにわかに関自分の装束をつけはじめ、すてはそれに手伝つた。五十二歳になる袴野は野装束をつけると、眼めつき附も足もとも違つたたくま逞しさを現しはじめた。しかしすての気づかいは本気で言つた。

「女にさわつたからだで出掛けていいの。」

「うむ、だがお前から貫もらつたものでおれが後うしろあし足を踏むことは滅多めつたになかろう。」

眼につかれがあつた。それを蔽うてあふれるものもある、ね、

気を付けて、袴野はその言葉にいつわりなぞ潜むものではないと思つた。山寨やまさいにはもう誰一人としていない、袴野は皆とは一足先にかえることが出来るし、塞とりでにすて一人を置いて行くことの安堵んどさは、どういう安堵したことがらよりも、さばさばしたものだつた。

すては谷間に下りる前に、袴野の下著したぎを取り出したが、ふと、野伏の下著もそれにまげて抱え、日あたりの谷間の岩のうえに坐り込み、野伏の下著をひろげると、その臭気を嗅かいでさわりを頬にあてて触さわつてみた、乳房から下腹部にかけて例のじいんとして来た、彼女はたぐり寄せて縋すがるようにまた下著を嗅かいだ、そして勢好く裸になると谷川の淵に飛びこんだ、泳ぎ終ると下著をそれ



それにすすぎ、若い木の枝にかけて干したが、暑い日ざしは彼女の洗った髪がかわくよりも早く、かわいていた。それを下げて塞に戻ると、野伏の下著は野伏の物の中につき込み、袴野の物は袴野のしきりのある塞の奥にしまい込んだ。

すてが再び塞とりでの前に立つて、例の手を拱こまぬいて見やった時に、廻はるかな山平に袴野ノ麿と貝ノ馬介とが、みやこの先刻の女を間に置いて、なにか問答の渡り合いでもしているふうであった。みやこの女はまだ市女いちめがさ笠を被り壺装束つぼしようぞくのままだったが、突然、貝ノ馬介がそばに寄るとその羅うすものを、さすがに手荒いふうではなく物穩ひきはかに引剥いた。日の中にさらされた何処どこかの姫の顔は、見たことのない白いものだった。すての顔はのぼせ唇はふるえた。袴野

と貝とが女の奪いあいでもめているのだ。すては塞にいま一頭の馬の用意のあることを知ると、密林の間道をひたすらに馳はしった。

すての馬上の姿を見ると、貝ノ馬介の小方こかた十人に、袴野の小方十人は機先を制せられて、勢好く著ついたすてを見上げた。すてはまず袴野の顔に激昂のあとのないのを見取り、ついで貝ノ馬介が手綱を取っている手の平の汗までわかるような焦あせりを、眉の間に見附けた。みやこの女はすてが現れたので、さらに二重の驚きをかくしきれないふうだった。すては袴野にいった。

「何故なぜ引き上げにならないの。」

「少しこみ入った話になったのだ、お前はあれに控えておれ。」  
「いいえ、この方かたの奪いあいの談合をしているのではないか、貝

様、そのようでございましょう。」

「この女の代りに財は皆袴野ノ磨に進ぜよう、と、そうおれが計つているところだ、だが、袴野は財は山割りにして女はみやこに還かえした方がよいというのだ。」

袴野はいった。

「この女をわれ一人で都に還すには、おぬしに疑義があろう、おぬしと二人で都はずれまで諸共もろともに送つて行つたなら、納得が行こうというもの。」

「そこで途中の藪やぶでその腕うでつ節ぶしで貝ヤが殺られるのか、そうは子供をあやすようにはまいらぬ。」

「貝、おれがそのような嘘吐うそつきに見えるか。」

「殺め仕事はその場のものだ、そうはさせぬと言つても、そうせねばならない時は殺るし殺られる。」

「ではこの場はどうする。」

「おれに任せろ、なあ、袴野、すて姫に指一本障らぬ今までのおれにあやかってくれ。」

「すてにはおれがいる、何を慌けたことを言うのだ、女はおれが都に還す。」

「そして女が訴えて出たら？」

「都はずれまで送つたものを無下にするようなお人ではなからう、姫ご、わきまえてもらえるか。」

「決してそのようなことは致しませぬ。」

その優しい箏ことのような声だけでも皆の頭は緊しまつた。その時、すてがいった。

「ではあたしが都はずれまでこの方を送りどけたら、苦情は両方になかろう、貝どの、それで財たからは山割りにし今日のところ引きわかれにして下さらぬか。」

貝ノ馬介は少時して意外にも素直に、肯うなずいて見せた。袴野は貝がにべもなく引下がったのがすて姫が口をきいたからであり、そのため袴野はいやな顔をしてみせたが、この場合こうさばくより外に仕様もなかつた。貝の物たずねたげなすてに色気のある容よ子うすにも、袴野は何時いつかはこの男を殺らねばならないことに、迫られては、貝に、よく聞き分けてもらえて嬉うれし

いい、貝は、すてどのの口利きでは貝も聞きとどけねばなるまいといった。

「ではお姫様、都はずれまでお送りいたします。」

まぶた

瞼の切れの上品な彼女は、もう、落ちつきを取戻してお計い何ともおん礼の申しようもございませぬといった。織せんしゆ手のかがや

きは貝ノ馬介のむねに、まだ名ごりを眼の内にとどめた。この女を還した後の何年かは、女というものをこの山中で知ることの出来ない残念さがあつた。しかしそれを押し切つて女をものにすれば、仲間が割れるばかりか袴野が刃がしらを向けて来るだろう。女一人を手に入れることは山塞者さんさいものにとって、全部の仲間を敵にまわすことにもなる、禁じられた女の肉体は命とすれすれの線に

引つかかっている。

突然、袴野の小方こかたの野伏が、立ち上つていった。

「すて様一人では途中が思いやられる。都の姫さまもそのままでは土民の戯れが気がかりだ。」

わしを供に遣やつてくれと袴野に乞うた。

袴野は言下にかぶりを振った。こういう機会をうまく、袴野にもすらすらと諾きかそうとする虫のよい肚はらが見えた。

「すて一人でも沢山だ、だが、小方二人あてを両方から従つけさそう、しかし野伏はならぬ。」

野伏は苦り切つて引き退がり、すては表には眉も眼もうごかさなかつた。袴野がこれを許すはずはない、でも、万一にも袴野が

聞いてくれたらと、それを思い遣るとすては大腿が躍る弾みはずを感じた。結局、両方から小方二人ずつが従ついて、都の女をすてが送ることになり、野伏ノ勝は居残ることになった。

日はまだ高く、二人は馬上で暑さを避けることが出来た。女と名づく者ともう何年も話したことのないすては、都の女の壺装束の綾と、うすものに心が惹かれた。そしてすては、都ではいま装束の流行はどうなっているか、高貴な女はみなやはり輿こしに乗っているか、道化のしばいがあるか、男はみな太刀をはき、かんむりをかぶっているかなどと訊たずねた。そして彼女は十三の時から都の町を歩いたことがない、衣装は悉ことごとく人から取り上げたものばかりで、あるいは短くあるいは長いと笑いながらいった。姫は馬の上



で、羅うすもののかぶり物、錦にしきの帯をといてすてに与えていった。

「わらわは四しじょういん条院の藤原良通ふじわらのよしみちの娘、時が経った後でもお訪ねあれ、必ずおかくまいいたします、名は良通の姫とだけ、：

…」

「いえ、あなた様をたずね身の振り方をつけるようなことなどは、先ず、ございますまい、山稼ぎ者は、ことに女の身は明日は誰の者になるかも分らぬ。」

「あなたはあのご老人の添い方でいらつしやいますか。」

「袴野に十三から育てられ、ただいまは妻になっております。袴野は父、そして夫に代る者です。」

「おん名は、」

「すて、すて姫とみながそう言っております。」

すては自分が都の女と、対等の女らしい言葉をつかい、女らしいよそおいが心にまで入ってくるのが、時間が経つとしだいに判り出して来た。上品なものに崩れかかるようなものが、すてを柔らかに仕立ててくるようであった。都の女はすての顔立にある男らしさを美しいといい、すては女はみなこうあらねばならぬ頸のほそれを、都の女にむか対つて褒めていった。

千畳の藪やぶ前まえで、間もない都がやや夕づいた景色を見て、二人は別れようとして、都の女はすての手をとり、いただくふうにして謝意をのべた。いのちも、からだをも守つてくださったあなたは、女であるからそうして下されたのだ、事情あつて都に遁のがれて

お見えの折は、きつとわらわを頼つて来てくれと彼女は先刻と同じようにいい、まぶた瞼をしばたいた。不思議な友情をはつきり見てから、すても永い間経験したことのない女の気持をむさぼるよう、むねにかきいだ推いた。すては元来た道を、うすものおもて羅で面を蔽うたまま馬をはしらせた。彼女はこの虫のたれぎぬ垂衣がうれ嬉しくてならなかつた。

この日袴野と小者らは一時に出払い、山塞には生きものは何も一匹もうろついていなかつた。すては髪を洗い岩の上でそれを乾かしながら、自分が山稼ぎの中のただ一人の女であることをなんとなく、気になり出していた。何時いつかの都の女をたすけてから、都の町のようにすが知りたかつたし、夜にまぎれて大路を歩いて見

たかつた。この岩上から見える都の煙らしいものは、きようもあ  
いたいとして愉たのしく揺よう曳えいしていた。彼女は野伏ノ勝を思った。  
だがどのようなにしても袴野の眼を掠かすめることは出来ない、岩のす  
きま林の中くさむらの間にも、袴野の眼がきらつくと思えば、そ  
こにならずその眼附めつきが見えていた。袴野に拾われなかつたらす  
ては、どうなっている女だか判らない、すての一心もここにある、  
仕えることの止むをえない、また心からのものも交つていたのだ。  
彼女はその時、自分の名前が非常に注意深い低さで呼ばれている  
ことを、殆ど半信半疑で耳にいれた。この間際に、すては貝ノ馬  
介がんじょうの 厳がんじょう 丈じょうなすがたを山寨の入口に見出した。それは勿論、袴  
野の他出を知つての事ながら、敵塞に踏みこむということはよほ

どの決意のもとで、そんなされたことを予感しなければならぬのだ。

「すてどの、馬介が、来ました。」

と、咄嗟とっさでは貝ノ馬介は子供のような不用意な声でいった。

「何の用かや。」

「そなたをいだ推きに参った。」

「たわけたことを言わしやるな。」

「ここまで来るからには、そなたにも決心のほどを知るがよい。

眼をつぶって男というものの賭けたいのちを頼む、それは無下に棄てさせないでな。」

「なりません。」

「そのように言わずに頼む、十年の間耐えていた。」

「……………」

「ただのいちどでよい、いちどで。」

「なりません。」

「手について頼む。」

「どのように言わしてもいやじゃ。」

「何としても反か<sup>そむ</sup>しやるか。」

「頼む、去<sup>い</sup>んでくれ。」

「去なぬ。」

「去ないでどうする。」

「そなたに思いを遂げるのだ。」

「あたしでも女ぞ、たやすくは、させない。」

すては、痒い<sup>かゆ</sup>髪を搔いて見せた。その二の腕は噛みつきたいほど、ふくれて白<sup>しろ</sup>がこぼれた。すての顔色は驚きも怖れ<sup>おそ</sup>もみせず、貝ノ馬介が見つめるままの生ぐさい、色気のあるものであった。馬介はずっと近づくといきなりすての手を取り、そばに引き寄せた。すてどの、かくごはしているなど、貝はがらにもなく優しく言った。いや、心は決めていない、貝どのがどんなふうに出て来るかを見極めているのだといった。貝は、すての裳<sup>も</sup>に手をかけそれをかかげようとしたが、すては一気に鋭く払い退<sup>の</sup>けた。ふたたび貝がそれを繰り返した時に、すては貝の手の甲をはたいた。貝はおとなしく手を引きこめると、こんどは肩を推<sup>い</sup>こうとし、それ

も、すてによつてはずみが食わせられた。すてどの、おれに狼の名を著<sup>き</sup>せぬよう承知してくれと、貝は拝むような眼附でそう言ったが、すては、ではあたしにも恥を搔かさないで推<sup>いだ</sup>いただけで帰つてくれ、貝どのの命にかかわることだからといった。

「何としても諾<sup>き</sup>きいれてもらえぬか。」

「もう袴野の帰る時刻じゃ。」

すては肩からながれる長いからだで、すらりと立ち上つた。

貝ノ馬介はもうどうにも自制の利かない、先々の考えを打<sup>う</sup>棄<sup>ち</sup>する時にかかつていた。彼はすての肩を上から圧して、坐れといった。すては素直にぺたんと坐つた。くずれる肉体はさすがに坐つたままであつた。すては貝からのがれる事はおろか、貝のままに



なるより外はなかつた。逃げてても逃げ切れぬし、挑いどんでも抗あらがい  
きれるものではない、ただひとつの事はうまくだまして貝をその  
まま帰すことだけが、一さいが無事にすむことになるのだ。しか  
しすては身をまかせることがいやであつた。ふしぎに考えたこと  
もないほど他の男に身をまかせることが、いやでいやで仕様がな  
かつた。知らんふりをしていればいいじゃないかと、たかを括くくつ  
てみるが、やはりいやなことはいやであつた。袴野は勿論野伏に  
も合す顔がない、なんだか合す顔がないということが、合されな  
い顔になると考えこむと、凜りんこ乎として来た。しかし貝は両肩を羽は  
搔が責せめにして、かかつた。

「すてどの、眼をつぶつて許してくれ。」

「なりません。」

貝ノ馬介は完全に、すてのすがたを自分の大<sup>だいひよう</sup>兵な装束のなかに、悠然としまい込み、すては気味の悪いほどしずまり返った。貝はもう言葉というものを発しなかった。物恐ろしい無言の人間が二人そこに置かれたきりだ。かたまりは何処<sup>どこ</sup>までも声のない間に、時間を揉<sup>も</sup>み潰<sup>つぶ</sup>していとかれなかった。貝どの、よしなされと低い声がそういった。何度もそれが言い続けられた挙句<sup>あげく</sup>に、こんどは叫びになってすての喉から、手むかう声がほとばしった。貝は依然無言だった。その時、すての顔色が突然紫色に変わり次にその唇を二つに割られたときに、貝はそこに永いくちづけをしたが、すてはその間に殆ど無意識になにかを啜<sup>くわ</sup>えこんだ。この

はずみに貝は突然、うああ、……という体軀からだの全部からしぼり出された声音こえを、続け様さまに草の間にうつ伏せになって発した。その時、非常に素早い滑なめらかさですては起ち上つて口元に手を遣やり、手にべたつく一杯の血を草の間にぺつとりと吐きつけた、そしてなおぬたつく口元に手をやって、いそいで谷間に下りると、続け様に水をふくんで、かあつと口を灑すいだ。すての顔色に斑点のようなあお白さが、最初はぽつぽつに現れはしたものの、次第にその斑点はそれぞれに溶け合つて全面を蔽い、彼女はお臀しりのような蒼白い顔の女になった、それは美しいというよりも、皮膚の静まり切つたふくらがりが、自分のしたことを些ちつとも悔いていない平坦さを見せ、その顔はかがやいているふうに見られた。

彼女が谷間から上った時には、貝は、のた打ったあげく、多量の出血でもはやあえなくなっていた。すてはそれを少時しばらく立つて見てから、ボロきれで顔を蔽い、木の葉をからだに被せかぶ、そして両手はしぜんがっしょうに合掌された。自分のしたことが判りはじめ、それより外に身を避けることの出来ない場面を、すては再度眼にえがいた。そして彼女はその芝の上に坐りこんだまま、芝をむしり取って汗をふいた。汗はいまになって全身を、濡らして来た。こうならなかったら、あたしは貝ノ馬介のものになり、袴野ノ磨のものでなくなつたはずなのだ、これより外にあたしのすること  
がなかった。彼女はまた夥おびただしい汗をふいた。貝ノ馬介の死体がふいにいま動いたような気がし、すてはボロきれを取ってその顔を

あらためて見たが、顔は思ったよりも苦痛の色をうかべずに、柔  
らかであった。すてはその<sup>まぶた</sup>瞼を優しく閉じてやってやはり<sup>そこ</sup>其処か  
ら動かずに、芝のうえに坐つてまた冷たい汗を<sup>ふ</sup>拭いて、貝ノ馬介  
の死体を茫然と<sup>うちなが</sup>打眺めていた。

半時ばかり経つて袴野の一行が、野狩の<sup>たから</sup>財を抱えて皆戻つて来  
た。

袴野ノ麿はすての顔色を見ると、彼自身の顔色もたちまち思い  
がけない驚きに、曇つた。

「すて、お前の顔色はどうした。」

すては黙つて<sup>ひとさし</sup>人差ゆびで、ボロきれをかむつた死体をゆつ  
りと指さして見せた、すては声が出なかつた。

袴野はボロきれを取り除いて、その死体の顔をあらため、殆ど  
叫喚きようかんに似た奇声があげられた。

「貝ノ馬介じゃないか、あ、舌を、すて、お前のしわざか。」

「ええ。」

「よくもやってくれた。」

「それより外にあたしの逃場にげばがなかったんだもの。」

むしろ冷然と、舌は偶然に噛み切ったのだ、その心算つもりは頭にも

抵抗の時にもなかったと、すては、他人事のように言った。

「おれはいま初めてすてを見直した。それほどにこの袴野を思う  
てくれていたとは、きょうまで気がつかなかった。」

何んの、と、すては自嘲じちようしてにが笑いをして見せた。

「ただこうなったのも、その場の廻り合せめぐみ、貝どのには相済まないこと、あなたにはそれがあたしのよそ事せぬようにして見せただけだ、あたしの心算つもりはそんな気勝きしょうげな気持ではない、ただ、いやでいやでじゃ。」

「からだは？」

「触られただけ。」

「お前はえらい女だ、もとは侍の落し子らしいが。」

「侍が何か。いまは山者のあぶれ女じゃ。」

袴野はこういうすてが気負つて言っているのだと思つたが、落お著ちつきはらつたすてに、こういう無関心な冷たさがあるうとは思えなかつた。袴野すらも手に負えない貝ノ馬介を、一撃のもとにや

った事が袴野の驚異以上のものだ、こういう驚異の元になるものを持つすてに、彼はにわかには警戒さえも感じた。わかい野伏と事をはかつておれにかかつて来ることはないとも限らない、きようは今までにない不思議な美しさを、彼はすての全面に感じた。殺意の後に来る色を失っている皮膚の乾燥した、わずかなやつれがやつと際立きわだつて見えた。

「すて、おれはお前をききようから大事に仕えるぞ。」

すては返事をせずに、依然、自嘲をつづけた。

「おれは余りに嫉妬深かった、お前の本来の心も知らなかったのだ。」

「それより貝どのを鄭ていちょう重ちゆうに埋めてやりや。」



「うむ。」

「貴人のようにあつかつてやつてくだされ。」

その時、袴野は偶然に貝の死体をこもの小者にはこぼせながら、その後について言った。

「すて、おれも何時かはこんな目に遭うかも知れない、あいて相手は何こ処にでもいる。」

「山者は仕方がないわ、野晒のざらしき、あたしだつてね。」

「お前は女だ、切りぬけて永く生きられる……」

「おなじ事よ、明日のことは誰も判らない。」

山寨は秋を経て冬にはいると、すての顔色は沈みがちに胸は苦

しく、殆ど食物に手をつけずに臥している日が多くなつた。袴野ノ麿は草根木皮をあつめてこれを煮てすすめたが、しるし験はなかつた。物忌ものいみや憑つき者のせいかと、袴野は都はずれに出掛け、医術の心得のある媪おうなをさがして歩いた。すて自身も何かのせいで憑つき物でもあるような日頃が鬱陶うつとうしく、溪流の岩の上に出て、激しい吐と瀉しゃ嘔吐おうとの叫び声をあげた。それは全身に波を打ってくるような苦痛であり、山の尾根までがその咄嗟とつさの吐瀉としゃのあいだ、波を見るそれのように揺れてくるような気がした。

或る日袴野は一人の年古びた媪おうなをつれて、すての容態を見せた。すてはこの媪の顔を見ると、人間が次第に古びて行つた処ところで厳しい表情になるものだということを知つた。媪はすてを見ると、か

んたんに言った。ああ、そうか、そうあろうより外に何もないと  
眩つふやいた。そしてすてに耳打ちしていった。

「懐妊じゃ。」

「懐妊とは？」

「腹に人間の子がうごいていることをいうのじゃ。」

すては驚きを現すまいとして、媼おきなに声低く訊いた。

「何時いつごろ頃かや。」

「夏の月の中ほどに思われます。」

媼は腹をさすって見てから、間違いないと言った。すてははじめて眼に驚愕の情をあらわし、そしてそれを直ちに承認するふうであった。媼は生れる月と日頃とを示して、迎えがあるなら何時いつ

でもまいりますと行って、下山して行った。すては疑いもなく貝ノ馬介のコードモを孕はらんでいることを知ったのだ。すては谷川べりに出て、眼にうるんだ優しい、いいようなないあまいようなものを腹の中に感じた。あの日のああいう短い瞬間に一人の人間は死に、一人の人間がうまれるべく用意されたことの、解きようなない出来事の謎がこの女を打って来た。袴野は彼女の前に突っ立つたまま怒ってどなった。

「一たい誰の子だ。」

すては答えなかった。袴野はその日からずっとふしと臥ているすてを、ふて寝でもしているように邪魔者扱いにし、きりようが衰えてゆく一人の女を卑しげに見据えていった。もつと隅っこに邪魔にな

らないよう寝ている、と。

春近くふたたびおうな媼が登山して来た時、袴野は媼を塞とりでの外に連れ出してきびしい質問を続け、媼は懐妊に不思議のないことを告げた、袴野はそれが孕はらんだ月をつぶさに聞き取り、媼にもはや訪れることなきように、叱るようにいった。媼はわたしのせいじゃあるまいしとつぶや呟いて去り、すてはそれらの問答の内容は判らなかつたが、袴野の怒った顔附が何のために怒っているかを知つたが、やはり冷然として這はい入つて来る袴野を見返つた。袴野はいった。

「誰の子だか言えたら言つて見よ。」

「貝ノ馬介どのの子供や、間違ひなく。」

「何故あんな奴の子を孕んだのだ。」

「そんなことがあんな時に誰が判るものか、阿呆あほういうな。」

「判らなかつたのか。」

「死ぬ覚悟で来た人だ、何があたしのちからで防げるものか。」

「そのがきは水で冷やして殺すがいい。」

「温めて永い間生かしてやる。塞とりでのぼろ屑くずをみんな持つて来い、

温めてふとらせてやる。貝ノ馬介が死んで生れて来たのだ。」

袴野は自分の猛るよりも、すての猛りがさかんで手向い出来な

い高飛車なものであること、懸命なそのくそ落著おちつきにこの女、人

がちがつて来たと思つた。それ以来、彼は塞の中に何時いつも二つの

瞳が、昼も夜もぎらぎらして近寄る気にもならなかつたが、よう

やく、野伏ノ勝が不浄物の始末をしているのを今は見遁みのがす気にな

つていた。野伏ノ勝は夜も昼もすてに附添つてみとりを続けたが、そんな小汚い女は汝にくれてやると、袴野はやけくそになって嘸な鳴なつた。勝はただ黙々として食しよくじ餌じのこと不浄物のことを、まめやかに立ち働いた。塞の奥のすての二つの瞳は或る日は野獸の凝視にもえているような時と、また、またたきを失っている茫ぼんやりした時と、あるいは野うさぎのように物かげにかくれようとしている時の、そのかがやきを交叉していた。

全山全塞に緑の季節が来て、媼は登山し、野伏ノ勝は白しろねずみ鼠ねずみのようにはたらいで、ついに、すては一人のでかい赤ん坊を生み放つた。赤ん坊は育ちに育ち、すてのきりようは赤ん坊を生んだ時から、顔にあつたざらざらしたものまで拭き取られて、すべす

べした美しい皮をかむつて来た。袴野の驚きはすての変貌にひきよせられ、彼は目をほそめて、すてのそばに寄ろうとしたが、すては叱り飛ばすようにこの老いた野獸を一挙に退けた。そしてその頃には、野伏ノ勝もそばによせつけなかつた。赤ん坊を抱いたすては、もはや、それだけで色気たつぷりのこぼれる景色のものであつた。何やら、えたいの判らない子守のうたが、塞の奥からほそぼそとそとにまで漏れて来て、小者どもも、あ、そうかとちよつと笑い顔になつて通り過ぎた。

袴野はすてから赤ん坊を取り上げるか、殺すかしなければ再びすてが自分の物にならないことを知つた。或る日すてが寝ている間に袴野は赤ん坊を抱き上げようとして、耳さと聡いすてに発見され



た。何する、と、すては叫んで赤ん坊を自分のむねに抱き緊めた。

「そいつがいるからお前はおれを嫌うのだ。」

「この子を殺す気か、本当をいえ。」

「おれに任せよ、苦勞のないようしてやる。」

「袴野どの、あたしは貝の舌を噛み切ったくらいの女だ、この子に指一本でも触つて見よ、あんたのからだぢゆうに、……」すては煤すすのようにくらいものを眼附に漂わして言い続けた、「……：か  
らだはおろか、ノドブエだつてがりがりみんな噛みくだいて遣やる、  
この子にちよつとでも触つたらそれがあんたの最後だと思ふがい  
い、ほらね、これだつて何の苦もない、……」

突然、すては爐ろにささった竹の火箸ひばしを手にとると、唇くわに啣くわえこ

んだと見る間に、あろうことかばりばりと上と下の白い前歯で噛み砕いた。歯と唇とから一面に鮮血が噴いてはしつた。袴野は凜乎としてあの日の貝ノ馬介の、どこが何やら見境のない血だらけの顔面を眼にうかべた。

「ほらね、唐金だつてね。」

彼女は再び唐金ののべ棒を手にとって見せた瞬間、袴野はいたたまらなくなつて、にわかにな用向きがあるよう努めて平気を装うて、急ぎ足で塞の前の場に出て行つた。あのまま昂らせて置いたら、歯は一枚もなくなるまで噛み砕くだろう、何という、何という女だ、あの赤ん坊をまもるためには奴は何をするか判らない、袴野は生れてはじめて怖れというものを、間近の、寢床ではだら

しないすてから感じた。ばかばかしい事だがと袴野は氣やすめに脅かしやがると思つてみたが、ばかばかしい事は決してばかばかしいものの正体ではなかつた。

袴野はすぐ塞の横手で野伏ノ勝に行きあつた。勝、この間から苦勞をかけたな、行くぞ、彼はそういうと藤ふじづる蔓を鞘さやのように巻いた山刀を、石の上でしごいて藤蔓を切り放つた。そして白刃を勝の眼の前にのべた。お前も何か持てと、袴野は呶どな鳴つた。勝は平然として言つた。袴野どの、おれを斬ると仲間が割れる、いまは大事な時だぞ、焦あせるまいと言つたぎり、野伏ノ勝は去つた。おれは早まつた、眼がくらんでいるのだ、彼は塞にもどると、すての手当をし、口を拭き薬草を塗つていった。謝る、すて、おれが

悪かったと彼はいい続けた。

数日後すては衆人の眼の前で、赤ん坊を抱いて、大胆に殆ど冷却しきつた顔附で、山寨を去ろうとしかかった。袴野はいった。

何処どこに行くのだ、彼女は言つた。

「何時いつかの四条院の姫様の所にこの子をお預りしていただくのや、姫とお約束してあるのだ。」

「そしてもう帰らぬか。」

「それは判らぬ、この子をしかと預かつてもらえるかどうかによつてだ、十三から育つたあんたの恩は無下むげにしない。」

野伏ノ勝が絞るような声音こえでいつた。「戻つて来なさい。」

袴野は一生懸命にこれも優しく言つた。「必ず戻れ、都ではお

前のような女はおちついていられぬぞ、これだけは真実だ。」

「戻るか、戻らないか判らない。」

袴野のいいつけで一頭の馬が用意され、すてはそれに跨ると例  
の羅うすものの虫の垂衣たれぎぬを抱えて、それを証拠に四条院の邸やしきと聞いたみ  
やこに、山の塞を去って行つた。茫然となすことを知らざる余り  
に不意な出来事に、袴野はいまさらすてのすべすべしたからだを、  
殆ど全身にむず痒かゆく感じながら物ほしげに見送つた。



## 青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月発行

初出：「新潮」

1956（昭和31）年1月号

※表題は底本では、「舌を嚙《か》み切った女」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 舌を噛み切った女

またはすて姫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 室生犀星  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>